

お念仏の教えという門に入ることができた人のことをいいます。

その真宗の門徒、私や皆さんも真宗の門徒です。教えを自分の目の前に据えて生活を営んでいく人のことを門徒といいます。この門徒といわ

く さ む す び

れる私たちには、やはりそこには、お仕事があります。どんなお仕事があるのかといいますと、「聞く」というお仕事があります。これが私たち真宗の門徒の一番の要といってもいいところかと思えます。聞くといつても、じゃあ何を聞けばいいのだろうか？お念仏の教えを聞く、確かにそうです。しかしその聞くというときには、まず教えを聞く前に、もつと先がけて、最初にどうしても聞かなければならないものがあります。一番最初に私たちが教えを聞くよりも先に聞かなければならない事柄は、私一人が人間という身をいだけいたということ。これが聞くことの一番最初です。最初から教えを聞くのではありません。まず聞かなければならない事柄は、私一人が人間という身をいだけたということ。ここから出発です。教えを聞

く肝心の事柄は、私一人が人間という身をいだけてきたよということ。ここに身ということを言いました。じゃあこの身とは、どのような身なのでしょうか。

私たちが生活しているこの身というのは、どんな身をいうのか？毎日、毎日生活を営んでおりますから様々な家族のことで悩んだり、あるいは近所付き合いや、会社勤めや、色々なことで苦しまなきゃならんし、そして否応無しにも家族、親族、友人あるいは有縁の方々の死というものを私たちは味わっていかなければならぬ。そうしますと、そこにあるのは悲しみです。私一人が人間という身をいだけた、その身をおさえて言うならば、何を抱えているかという、苦しみと悩みと悲しみやえ込んでいます。私たちはこの身を生きて、この身は具体的には何を抱え込んでいるのかという、苦しみと悩みと悲しみです。それをそれぞれの方が抱え込んで、一日、一日というものを送っておられると思

います。そして今日、この浄光寺さんの報恩講というかたちで私も皆さん方もここに集うてまいりました。それは単に浄光寺さんの報恩講が十月十七、明日十八日と勤まりますよという案内があったからここへ来たのではありません。浄光寺の報恩講だから、案内が来たからここへきたと思いがちですけれども、それは違うわけです。

なぜ私たちがこの本堂に身を運んで来たか？それは案内があったからではなくて、実はもつと大変なことを私たちは持っているからです。何を持っていかという「助けてください」ということです。これを持っているのです。「どうか助けて下さい」といつてこの本堂に足を運んできたわけです。自分の奥底にあるものが、この本堂への足を運ばせてくれるのです。

じゃあ一体「助けてくれ」といつている奥底に何があるのか？あるんですね、それが。「このままこうやって命を終えていくのは、ちょっと不安だなあ」と。「どうして人間と人間が家族でありながら、ご近所であり

ながら、仲良くできないのだろうか」「この歳になってみたら、いつの間にか家族からは疎外されて、家族といいながら自分だけ一人ぼっちになった感覚が日々あるなあ」「家の中におつても自分の居場所がないなあ」「ああ、このまま命終えていくのは寂しいことやなあ」。これを私たちは持ち合わせているのです。自分の奥底の深く深くに眠っているのは、今申しましたような不安と仲良くできない、居場所がない、虚しさ、これを私たちは日々抱え込んでおるわけです。その抱え込んでおるものが「助けてください」といつて本堂に足を運ばせるのです。案内があったからではないのですよ。自分の中の奥底にそれだけの深いものがあるということです。

そのことは親鸞聖人の生涯を捉えても同じことがいえるわけです。親鸞聖人が出家得度されていかれた先が、冒頭で申しましたように比叡山延暦寺です。最澄という方によって開かれた天台宗の総本山です。その最澄という方が、この比叡山で私は

仏道をこれから開いていきます。その仏道を学ぶ時の一番大きな中心は何ですかという時、こう言われました。「国宝とは何物ぞ」国の宝とは一体何だろうかということ。現代の私たちが申しますと、奈良、京都や日本中にある由緒ある建築物や、奈良時代、平安時代などに書かれた古い書物などを国宝と現代の私たちはみております。

ところが最澄さんは、冒頭で「国宝とは何物ぞ」とこう問われました。その後にはこう言われました。「宝とは道心なり」宝物は道を求める心です。そして「道心あるの人を国宝と名づく」と。これが最澄という方が、比叡山を開かれた時の一番最初の願いです。ここで仏教を学んでいく人は、こういうことを求めて来てくださいます。つまり親鸞聖人も比叡山をなぜ選んだのか。別に興福寺、あるいは当時八宗と呼ばれる大きなお寺さんへ行けばいいのですけど、なぜ比叡山に行ったのか。この言葉がひとつ親鸞聖人の中にちゃんと響いたのでしょうか。道心です。「道心あるの人を国

宝と名づく」。天台宗と浄土真宗違いますけれども、「助けてください」といつてこの本堂に身を寄せた私たちは国の宝物です。お一人お一人がみんな道を求めて来ておるわけ。自分の奥底に眠っているどうにもならんものを抱えておるからここへ「助けてください」と来た。それは最澄さんによれば、あなたは国宝ですよ。ちゃんと道を求める心が足を運ばせていますねえと。まず私たちの存在というのは道心があるということ。その道を求めていくことが、先ほど申しました、「このまま人生を終えていくのは不安だなあ」、「人間と人間が仲良くできないのは何でだろう」、「自分には居場所がないなあ」、「このまま命を終えていくことは虚しいことやなあ、寂しいなあ」というその心が宗教心と呼ばれたり、求道心といわれます。私たちの一つ一つの中にはちゃんとそれを抱え込んでいます。その抱え込んだ者として私たちはここに足を運んで来られました。まず私たちは、まさにこの苦しみ悩み悲しみの身をいただき

ながら、どうにもならんものを抱えて、今日この本堂に足を運んできた。それは国宝、道心を求めているからです。その身というのは苦しみ悩み悲しみです。その苦しみ悩み悲しみの中から私たちは教えというものを聞いていくわけです。

今から二千五百年前にインドで、後にお釈迦様と呼ばれる人の男子が生まれました。そして私たちは、お釈迦様によつて仏教が開かれたというふうに了解しております。しかし、お釈迦様が仏教を開いたと私たちは言うておりますけれども、果たしてそうなのでしょうか。お釈迦様も最初は私たちと同じです。ひとり人間という身をいただいて生まれたてきたからです。最初は一国の王子という生まれながらにして王子という立場で生まれてきた。後には国王の地位につく方です。ところが生まれてすぐにお母さんを亡くしてあります。お母さんを亡くしているという事は、悲しみをもうすでにいたただ方です。生まれながらにしてお母さんを亡くしておるのです。つま

り悲しみをまず持った方です。そして、国を守るための城壁があります。成長したお釈迦様は、お供の者と一緒に、町に暮らす人々はどういう生活をしておるのだろうかという町に出ていく。それが皆さんもよく知っておられる「四門出遊しもんしゅつゆう」というかたちで呼ばれている事柄です。ひとつの門を出たところで、老いて歩んでいる方を見た。ご老人にあった。次の門へ行つた時、病に遭うている人に出会った。次の門へ行つた時、悲しみ崩れながら亡き人を送る葬送の場に会った。最後は僧というものに出会った。

そうするとまず母を亡くしたという悲しみ、そして四門出遊というかたちで、生活する人間の一人ひとりの生き様を見た時に、「なぜ人は老いていくのだろうか」、「なぜ人は病になつていくのだろうか」、「そして「なぜ毎日、毎日たくさんの命を奪って、生きたい生きたいといっている命を奪って、それを食べ続けている私も最後死んでいかなければならないのか」と。苦しみ悩みです。ひとりの王子として生まれたけれども、母を

亡くした悲しみと人々の生きる姿を見た時に、「なぜ人間は生きなければならぬのだろうか」、「なぜ人は死ぬのだろうか」、「そこまでして生きていく意味は、一体何処にあるのだろうか」と苦しみ悩み悲しみを抱きながら生活を送っていた方です。

そして二十九歳の時に国王になる地位を捨て、妻を捨て、子供を捨て、友を捨て、権威、権力、財産を捨てて出家されています。そしてあらゆる苦行の苦行を通した六年間。三十五歳の時、もうヘトヘトになって、「あらゆる行を積んだけれども何ひとつ明らかにならない。もうこのまま命を終えてもよし」と言つてへたれ込んだのが菩提樹の木の下です。十二月一日と書いてあります。へたれ込んだのですからもう立ち上がる気力もないわけです。這うて何処かへ行く気力もない。ただ座り続けた。座り続けて、座り続けて十二月八日、明けの明星が昇る頃にはじめてお悟りを開かれた。

そうしますと今申しましたように仏教は、釈尊によって開かれたというよりも、ひとりの人間が持つてい

る苦しみ悩み悲しみのところから見出された教えです。最初から仏教という教えがあつたわけではないので。あつたのはひとりの人間が抱えている苦しみ悩み悲しみで、そこから見出されたのが教えです。その教えが苦しみ悩み悲しみを抱えている人間を包み込んだ。それが教えそのものです。私たちもひとりの人間という身をいただいて苦しみ悩み悲しみを抱いています。そこから逆に見出されていくわけです。「苦しみ悩み悲しみを通して本当のことに遭遇していきたいなあ」、これが私たちが道を求めておる大きな事柄ではないでしょうか。その道を求めていく、心、求道心、それはまさに苦しみ悩み悲しみです。

ご承知のように今年には様々な大きな災害が日本各地で起こり、特に三月十一日の東日本大震災というのは、皆さんもあの現実をリアルタイムにテレビではつきりと見られたと思います。福島原発の大きな問題を抱えて故郷を捨て、職業を失い、家族を失い、日本中に避難されている

方もいます。風評被害によって様々な影響も出ております。七ヶ月経つても、悲しみは癒えるどころか逆に深まってきております。

その事実の中にあつて岩手県に岩手県立大槌高校おほづちという高校があります。その三年生のうち十人の方は家族、家全てを失つた生徒です。ところが県立大槌高校の体育館は、大槌町の町民の避難所として五月末まで開放されました。その間、在校生の方々は、避難されてきた町民の方々の面倒を一生懸命にみていた。そのことがテレビ局、新聞社によって大きく報道されました。「一生懸命に町民のお世話をする高校生」と美談として語られました。ところがその報道をあまりにも美談過ぎると副校長が各テレビ局、新聞社に「あなた方は一体何を報道しているのですか」と警告したわけです。「あなたは高校生の美談としてしか映していいのですか」、「どこを見ているのですか」と、副校長は怒つたのです。なぜ怒つたのか。日中は確かに一生懸命に町民の方々のお世話をす

一人ぼっちなのですよ。「その一人ぼっちになった十人は、夕闇が迫ってきて真っ暗になった時、一人ひとり電灯も暖房もない校舎の中へ入ってみんな号泣しているのですよ」と。「なぜこの姿を言わないのですか」と。一人ひとりが、日中は気丈な心でお世話するけれども、夜になつたら十人が十人、誰にも気付かれなように号泣しているのですよと。

なぜ泣くのでしょうか。なぜ十七歳、十八歳の子供たちが日中は笑顔でありながら、夜になつたら泣き崩れるのでしょうか。それほど苦しみ悩み悲しみが大きいということでは苦しみ切れないのですよ。私たちは苦しみ悩み悲しみがあつても、何とか乗り越えようと我慢する。でも実際は、苦しみ悩み悲しみのほうが人間より大きいのです。大きいから崩れるしかないのです。崩れながら色んな事を思っていると思いますよ。「なぜ自分だけ生き残つたのだろうか」、「なぜ自分だけ生き残つたのか」、「なぜ一緒に死ぬことが出来なかつたのか」。さらにそこから「悲しみ

けれども、一番肝心なことと言われる
と「ハテ？」と。「ハテ？」と思う
から苦しまなければならぬ。まさ
に私たちは、この苦しみ悩み悲しみ
を持ちつつ日々を生きてきているの
ですよ。ところが申しましたように、

苦しみ悩み悲しみというのは自分で
「どうしようか」、「どうしようか」と
いうようなものでなくて、本当に苦
しみ悲しみというのは、人間よりも
大きいのです。だから私たちは、泣き
崩れなければならぬ。それほど人
間の持っている苦しみ悩み悲しみと
いうものは深いんですよ。

例えば、現代の多くの日本人が、
ひとつの現代病と呼ばれている病気
に、子供から老人までなっております。
す。それがうつ病という病気です。
そのうつ病の診療をどこでするか
というと、心療内科というところ
です。心の病を治す科です。そしてその
躁状態そうじょうたいと鬱状態うつじょうたいの差が激しいもので
すから、それを平衡に保つためのお
薬が処方されます。現代のうつ病と
いうのは、薬では抑えられています
けれども、いくらお医者さんでも薬
では抑えられないものが人間の苦し

み悩み悲しみです。鬱状態や躁状態
はお薬で平衡に保たれています。が、
その人がもっている一番奥底の苦し
み悩み悲しみは、薬では解決してい
ません。それほど私たちの苦しみは、
深いのですよ。

ところが現代の私たちは軽く考え
ています。一人ひとりが抱え込ん
でいる苦しみ悩み悲しみを軽く考え
ているのです。だからどうするか？
七千八百円で温泉旅行。美味しいも
のがちやんとついて、お土産も果実
園へ行って食べ放題取り放題。温泉
付いて、食事も付いて七千八百円、
「さあ行きましょう」、みんなこうで
す。確かにやっている最中は気が晴
れます。ところが帰りのバスに乗っ
て、だんだん我が家が近づくとまた
嫌な思いがしてくる。絶対に気が晴
れないのですよ。それほど私たちの
抱えている苦しみ悩み悲しみは深い
のですよ。でもそれを現代の私たち
に気晴らしをさせようさせようとい
うかたちで蔓延しております。でも
一向に解決しないのですよ。お医者
さんでも駄目。その時に、ではどう
やって苦しみ悩み悲しみというもの

を受け入れていくのか。この苦しみ
悩み悲しみ、そのことが実は、私の
身なのだということ。です。

それをお預かりしておりますご門
徒の八十二歳のおじいちゃんが、私
の目の前でこういうことなんですよ、
ということを持って教えてくれ
ました。それは三月十九日の土曜日
のことでした。夕方そのおじいちゃ
んの家から電話がかかってまいりま
して、「明日二十日の日にあなたも
知っているうちの孫娘が嫁いでいき
ます」と。その嫁ぐ前日のこの時間
に「ちようど家族全員七人がそろっ
ているから家来てくれんか」と言う
のですね。「家来て何するんや？」と
聞いたら、「正信偈のお勤めしてほし
いんや」と言うのです。「家族七人と
あなたの八人で正信偈のお勤めした
いので、あなた来てくれませんか」
というお電話をいただきました。最
初断つたのです。「わざわざ孫娘が嫁
ぐ一番最後の家族水入らずのところ
にそんな坊主が行って、ちゃべちゃ
べと正信偈のお勤めするよりも、じ
いちゃん、あなたが調声ちょうせいして家族そ
ろってお勤めしたら、孫娘さんも嫁

ぐ前日が自分の生涯の中で忘れない
日になりますよ」と言つたのです。
でもおじいちゃんは「ダメや」と言
うのですね。「ダメや来てくれ」と。
しましてお伺いしました。それでお
伺いしてお内仏がある座敷で正信偈
のお勤めをして、蓮如上人の御文ごふみを
拝読しました。そして場所を居間に
場所を変えて、コーヒーをいただき
ながら世間話やお孫さんの話をし
ておつたのですね。その話をしている
最中にそのじいちゃんとはあちゃん
が、孫娘に「私たち夫婦からの贈り
物や」と言うて三つのものを孫娘に
手渡たされました。

さて皆さんちよつと考えてみてく
ださい。何を贈つたと思われませ
か？一つは皆さんもお持ちの数珠で
す。それともう一つは真宗大谷派の
正信偈が載っている赤い勤行本ごんぎょうほん、こ
れを贈りました。あと一つは法名。
在所の子供たちが小学校の時に京
都の東本願寺に夏休みに行つて、そ
して親鸞聖人の前でおかみそりをし
て、おかみそりの時に授けられた法
名。もう孫娘さんはそんなことはと

うに忘れておったんですね。でも、じいちゃんはやんとそれを憶えていて、念珠と勤行本と法名の三つのものを渡しました。

ただ渡しただけではなく、ちゃんと言葉を添えました。その言葉を聞かせるがために私が呼ばれたのです。平生、お参りに行った時にはスポーツのことか天気のことか田んぼや畑のことかしゃべらんじいさんです。ところが孫娘に三つのもをプレゼントした時に、こんなことを

す び む さ く

言いました。「あなたは明日、披露宴やいろんな所で周りの人からおめでとう、おめでとうと言われるかもしれないけれど、むしろ夫婦はおめでとうとは絶対に言わんからな」と、ま

ずこう前置きました。そして何を言ったのかといいますと、「明日から嫁いだといっても、あなたの前には、ほんなめでたいことはひとつもない」。「あるのは苦しみ悩み悲しみやわいと」と言うのです。「結婚したら旦那さんのことで苦しまなきゃならんこともあるやろうし、子供が授かれば授かったで躰けのことや学校の勉強のことで悩まんなんやろう。

そして向こうにもわしらと同じような年代のじいちゃん、ばあちゃんもおるぞと。その人はわしらも含めて必ず先に逝くからな。必ずいろんな面で悲しまんぞ」と。これが八十二歳のじいちゃんが孫娘に贈った言葉です。あなたの前には、苦しみ悩み悲しみしかないぞと。

そして言った言葉、「もしもその中で旦那さんのことや子供を授かって、もしも自分の人生の歩む方向が分からなくなったら正信偈を開きなさい。法名を開きなさい。ここにちゃんと人間という身を生きていうことが書いてあるぞ」と。すごい

よ、「わあーっ」と言って。まさに先ほどのローマ法王と一緒にすよ。自分を本当にちゃんと見つめてくれる人がいたんだということですよ。小さい時はじいちゃん、ばあちゃんと言っておったけれども、だんだん大きくなって高校生にもなったらじいちゃん、くどいておった、「あの孫娘はなんもわしらのところに近よって来ん」と。ところがその孫娘が結婚の前日にじいちゃんの本当にさらけ

です。ここまで聞いておったのかなど。私と話す時は、先ほども申しましたように、天気とスポーツと田んぼと畑のことしか言わんかった人ですよ。それが孫娘を送り出す時に、本当の人間のあり様を語ったんですよ。自分をさらけだしたんですよ。八十二年間生きてきた中で自分の苦しみ悩み悲しんで悪戦苦闘してきた生活をそのままさらけ出したんですよ。

それほど私たちは一人の人間という身をいただいたということを語る

ことです。教えを聞く出処はまず最初は一人の人間という身をいただきたい、そこにもう一度帰って教えに聞いていくということです。この私がここに人間に生まれてきた。その人間に生まれてきたということはどういふことなのだろうか、そこにもう一度帰るといふことです。その帰る時に、私たちが一番問わなければならないことがあります。

「私の生涯」、「私の人生」、「私の一生」という言い方を新聞、本、テレビ、様々な所でこの言葉は使われます。今日まで歩んできた私の生涯、今日ここにいる私の一生、私の人生がここにあります。しかし「生涯」、「人生」、「一生」と言っても最初からあるものではありません。最初から生涯あるわけでないし、人生があつたわけでないし、一生があるわけはありません。これも出処があるわけです。出発点があるわけです。「生涯」、「人生」、「一生」には出発点があります。出処は一日だけです。私たちがあつたのは、たった一日です。一日がなんとか無事に終り、また一

日、一日、一日・・・積み重なってそれぞれの方の「生涯」、「人生」、「一生」をつくっています。あるのは一日だけなんです。時間で言いまして二十四時間です。八時間寝ている人は引いてみてください。十六時間です。つまり十六時間が動いている時間です。じゃあ、十六時間のなかで、私は人間に生まれてきたということ、をどれだけの時間たずねていますか、何秒かたずねていますか。私たちは一日で何をしておるか。「あーでもない、こーでもない、損か得か、あの人にああ言われた腹立てた」、こればかりじゃありませんか。そのことばっかりで一日を終えていく。その一日一日だけでも、文句も言い、腹も立て、色んな事を言っている一日が何とか無事に悩み苦しみ悲しみながら終えて、またそれを積み重ねてきた。あるのは一日なんです。この一日の中に、「今一度、どこかで人間というものに生まれたということとを聞いてくれよと、あなたのなかに助けてくださいというものがあるはずですよ」と、それを聞きにここに来たのですよ。ご本尊に親鸞聖人

にお勤めに出遇うとはそういうことです。私のお話を聞きに来たのではない。ご本尊と内陣の莊嚴とすべてに「助けてください、私の生きる道をたずねます」と、こうやってここに来たのですよ。

それが『正信偈』のことば

「重誓妙声聞十方」です。仏の誓いが名となって、それが声となって十方に生きとし生けるものに聞かしくんというはたらきをしているということ。名が声となって聞かしくんというのです。仏さんのほうが願うているわけです。「いのちあるすべてのものよ、聞いてくれよ」と。その願いを聞いてくれよというのです。名が声となって。その名、南無阿彌陀仏が。誰の声？我が身の声となつて、ナンマンダブツがひとこと言ってもふたこと言っても、発したその声はちゃんと自分の耳に聞こえています。名が声となってどうか聞いてくれよ。何を？誓いを、願いを。その願いに気づけと促されているものを人間ということです。その人間に生まれてきたね、そのことをもう一回

訪ねよう、平生忘れていたからこのことをもう一回確かめていきましよう。べつに仏さんは怒っておるわけではないのですよ。「一緒に聞いてくれよなあ」と言っているだけです。「苦しいやろ」、「つらいやろ」、それを持ちながら聞いていかんかということです。それが「重誓妙声聞十方」。

「聞く」ということは簡単なようで、

実は聞くこと難し。本当に難しいのですよ。遇い難き仏法に遇うことがなかなかできない、その中で聞いていくのです。聞いていくということ。聞かえてくるということ。願いが私に聞こえてきますよということ。聞くということ。聞くというよりも聞かえてきましたというのです。

平生忘れていた、自分は人間であるということ、どうかもう一度聞いてくれよという声。私が私によく聞きました。それを親鸞聖人は「涅槃のたどるをばひらきける」と。ようやく人生に、自分の生活の上に、はじめて聞こえてまいりました。それが冒頭の「諸仏方便ときいたり 源

空ひじりとしめしつ 無上の信心おしえてぞ 涅槃のたどるをばひらきける」(真宗聖典四九九頁) ようやく私の生活の中に、生涯に、人生の中に、はじめて教えを聞く門に入るこゝができました。それを真宗門徒というふうに関鸞聖人はご自分で名乗られております。どうかそういう意味でもう一つこの聞くということを大切にしながら、またこの本堂に足を運んでいただけたらと思います。長くなりましたが、ご縁をいただきました。まして有り難うございました。

◇平成二十三年十月十七日、浄光寺報恩講の法話録でございます。まことに勝手ながら当方において抜粋、編集させていただきますものであることをお断りいたします。

◇左に年中行事が記してございます。万障繰り合わせて参詣いただき、「救われがたきは、本当の私なり」と知らしめられる大切に耳を傾けていただきたく存じます。

◎次回は「除夜の鐘・修正会」です。

除夜の鐘	十二月三十一日	午後十一時半
修正会	一月一日	午前0時
お太子さん	三月二十日	午後一時
孟蘭盆会	七月十三日	午前六時
追弔会	八月十三日	午前十時
報恩講	十月十七日 十八日	午後一時半・夜七時 午前十時半